

関川夏央

人間
晩年
凶卷

2000年代編

〈第2回〉



写真提供：共同通信社

明るいニヒリストの テレビ的人生

—青島幸男—

- あおしま・ゆきお
- 放送作家、テレビタレント、作家、参議院議員、東京都知事
- 2006年12月20日没(74歳)
- 骨髄異形成症候群

一九六八(昭和四十三)年以来参議院議員をつとめた青島幸男は、五期目なかばの九五(平成七)年三月に議員辞職、四月、東京都知事選に出馬した。この選挙では、官房副長官として七人の総理大臣を補佐した^て手練れ官僚石原信雄が、自民、公明、社会、各政党から推薦と支持を受けて絶対有利と見られていた。四期つとめた鈴木俊一前知事も石原信雄を後継者と公言した。

しかし青島幸男はその知名度の高さだけではなく、東京都民の「反政党」の気分を追い風とした。鈴木前知事が強力に推進してきた「世界都市博覧会」の開催中止、ほとんどそれだけを公約に掲げた青島幸男は百

七十万票を獲得、石原信雄、大前研一、岩國哲人、上田哲らを破って当選した。このとき満六十二歳であった。

しかし当選翌月の五月、青島知事あてに送られてきた小包が秘書室で爆発、開梱した職員が重傷を負った。その年三月に地下鉄サリンテロを実行したオウム真理教が、所管官庁である都に解散命令を出させぬための犯行であった。

知事就任後の青島が、かつて赤塚不二夫の「バカボンのパパ」が何かにつけ「国会で青島幸男が決めたのだ」と叫んだような大衆的人気から見放されたのは、「都市博」中止のほかにも目立った政策はなく、また都民が期待した「破天荒なまでの決断力」は見られず、官僚任せに終始すると映ったからである。

一期四年が経過した一九九九年春、ぎりぎりまで進退を明らかにしなかつた青島知事は、結局二期目不出馬を表明した。渋々という印象で彼が後継指名したのは、衆院議員を辞職して出馬した鳩山邦夫であつた。しかし鳩山邦夫は選挙で石原慎太郎に一蹴された。

二〇〇一年、参議院「二院クラブ」代表に復帰した青島幸男は第十九回参院選に比例区から出馬して落選した。○四年の第二十回参院選では東京選挙区に転じて五十九万票を得たが、やはり落選した。六八年、参議院全国区第二位当選して以来、参院議員五期、都知事一期をつとめた青島幸男は初当選から三十六年後、七十一歳で政界を引退した。

テレビの黄金期をつくった「やんちゃな次男」

高度経済成長期の時代精神をテレビ画面上で体现した青島幸男は、一九三二（昭和七）年、日本橋人形町の老舗仕出し弁当屋の次男として生まれた。

幼いときから口達者で芸事好き、とくに三笑亭可楽の物真似が巧みで、「湯はチンチン沸いてるし、物事は順序（じんじょ）よくいってらあ」と語る江戸弁の口跡はそっくりであった。旧制武蔵中学から、戦後の新制切り替えのとき早稲田高等学院に転じ、そのまま早大商学部に進んだ。

学部卒業間近に結核と診断されたので就職をあきらめ、商学部大学院に在籍した。結核が治癒すると大学院は一年で退き、銀座でバーを経営

したり、漫才の台本を書いたりした。サラリーマンになれなかったという思いは後年作詞した「スーダラ節」などに、明るく、かつ複雑なかたちで反映された。

六八年秋から八年間、日本テレビ「お昼のワイドショー」で「ホスト」青島幸男と共演した中山千夏は、女優・タレントとしての回想記『芸能人の帽子』に青島との交流に一章を立て、「青島幸男は作為のない正直なタレントだった」「その第一の特色は虚無主義、ニヒリズムだ」と書いた。『芸能人の帽子』は青島を扱った批評性に富んだ章のみが、とびぬけておもしろい。

「群れるのが大嫌い」とはつねづね本人の口にするところだったが、中山千夏の目に青島幸男は、「人との交流にはまったく興味がない」と

映った。青島の家にはコント作家志望の青年たちが始終たむろしていたが、彼らは弟子ではなかった。文字通りの居候であった。

青島幸男は中山千夏に、「ママ(妻)は実家の店の手伝いに来てくれていた遠縁の娘さんで、兄貴との結婚が決まっていたんだが、オレがどうしようもなく惚れた。それで兄貴が譲ってくれたんだ」と告白したことがあった。

さらに、自分が影響を受けた小説はレイモン・ラディゲの『肉体の悪魔』、映画はスタンリー・キューブリックの『時計じかけのオレンジ』だといひ、中山千夏にも勧めた。要するに青島幸男は、勘働きだけはよい「バカ女」を「教育」しようとしたのだろうと彼女は考えた。

青島幸男は、「亭主関白の父と肝の据わった母、それにデキのいい兄

貴に愛されたやんちゃな次男」そのままであった。愛人宅に出掛ける父親の衣裳を整えて送り出す母親を不思議とは思わず、むしろ父親のそんな「豪快さ」に憧れて、自分も「家父長」の典型たらんとした。それが中山千夏の見立てであった。

そんなタイプと、やがて「ウーマンリブ」に目覚めて活動家となる中山千夏では本来相容れないはずだが、青島幸男は夢にも疑っていない。というより、女性に意見があるなどとはハナから信じていないのである。ふたりがはつきり衝突するのは、七七年に政治団体「革新自由連合」を創設した中山千夏が三十一歳で史上最年少の参院議員となり、青島自身も三選を果たした八〇年の選挙後のことである。

新米作家の「カラ威張り」と「大ボラ」

青島幸男が初めてテレビに関係したのは二十六歳の五九年春、フジテレビ開局翌日放映開始の「おとなの漫画」の台本作家としてであった。旧制中学で同級、東大を経て文化放送のアルバイトからフジテレビ社員となった梶山浩一すぎやまに誘われ、「おとなの漫画」の作家チームの一員となった。梶山は六八年に「すぎやまこういち」の名前で流行歌の作曲に転じた人で、「恋のフーガ」「花の首飾り」「亜麻色の髪 of 乙女」「学生街の喫茶店」などのヒット曲をつくった。さらに後年、ゲーム「ドラゴンクエスト」の主題音楽で若い世代にその名を広く知られた。

「おとなの漫画」は月曜から土曜まで、お昼十分間のナマの帯番組で、

当日の朝刊から社会的・政治的事件を拾い出して仕立てたコントを、コミック・ジャズバンドのクレージーキャッツが演じるのである。キノトール、三木鮎郎、永六輔らが中心で青島幸男はいわば補欠だったが、テレビ放送勃興期の放送作家たちは多忙をきわめたため、自然に青島が主軸となって六四年暮れまでつづいた。

日米安保条約改訂目前の六〇年初夏、石原慎太郎、江藤淳、大江健三郎、浅利慶太、羽仁進、永六輔らを中心とした「若い日本の会」の集まりが麴町の都市センター・ホールで催された。それは国会多数派・自民党の「改訂安保強行採決」に反対する集まりであったが、やがて会場は情緒的に過熱、全員で国会に「安保反対」のデモをかけようという空気が醸成された。

へ(そのとき)角刈りみたいな頭の若い男がマイクの前に立ち、

「私、フジテレビで、クレージーキャッツの皆さんの『おとなの漫画』の作者として、政治的圧力と日夜戦っている青島幸男であります」

と自己紹介した(小林信彦『テレビの黄金時代』)

青年のたたずまいの軽さと重たげな言葉の対比が会場の爆笑を呼んで、緊張は一気に緩んだ。国会へのデモは腰砕けとなった。翌六一年に日本テレビで始まるバラエティ「シャボン玉ホリデー」中のギャグ、「青島だア」とおなじ構造だろう。すなわち「痩せ犬のカラ威張り」のおかしさであった。

一方「光子の窓」(草笛光子MCのバラエティ・ショー、日本テレビ)の脚本家としてすでに定評を得ていた永六輔は、国会前のデモに積極的に参加

して原稿を落とした。プロデューサーの井原高忠は、「デモに行くのは自由だが、ホンを書いてから行け」と激怒し、以後永六輔を干した。

六一年、青島幸男が作詞した「スーダラ節」(作曲・萩原哲朗)が大ヒット、歌った植木等とともにその名を広く知られた。

運転免許を取って美容師の免許も取る、と青島が周囲に宣言したのはこの時期である。さらに、自分が主演の映画を撮る、直木賞も取る、国会議員にもなる、といった。周囲は大ボラと受け取ったが、彼は本気だった。

美容師の免許は、放送作家の命は短いと踏んだからであった。当時、男性の美容師志望者はまれだったが、青島幸男は若い女性たちにまじって真面目に専門学校に通い、試験に合格した。六六年、自ら主演・監督

した映画『鐘』をカンヌ国際映画祭に出品、批評家週間の入選作となった。六七年からは読売テレビの長谷川町子原作「意地悪ばあさん」に主演して高視聴率を得た。

「恐るべき器用人」 青島幸男の生き方

六八年、青島幸男は第八回参院選に全国区から立候補、三百一万という大量得票の石原慎太郎に次ぐ百二十万票を得て二位当選したのは満三十六歳となる六日前であった。この選挙では四位に作家兼僧侶の今東光、七位に東京五輪女子バレーボールチーム監督の大松博文、二十五位にお笑いタレントの横山ノック(山田勇)が入った。石原、今、大松は自民党から出馬したが、青島と横山は政党無所属だった。

七一年三月、国会予算委員会で無所属議員たちの院内会派「二院クラブ」を代表した青島幸男は、ときの佐藤栄作首相に政治資金規正法改正に関して質問した。

「もし理想的な政治資金規正法がつくられて厳密に運用されたら、自民党政府は存立できないだろう。だから現政府で政治資金規正法の改正はできない。資本主義国家だから、企業から金を集めて政治資金にするのは、そのことを明らかにする限り構わない。だが、集金先を明らかにできないというなら事態はいつそうはつきりする」

といったあと、青島はこう断言した。

「総理は財界の提灯持ちで男妾おとこめかけである」

この発言に強く反発した自民党は懲罰動議を出した。しかし結局見送

りとなったのは、懲罰決議のためには本会議で対象者に時間無制限の弁明の機会を与えなくてはならないからだろう、と青島本人は推理した。だが「財界の男妾」のくだりは会議録から削除された。

七四年の参院選にも青島は立候補、このときは選挙運動をまったくしなかったにもかかわらず再選された。実は六八年も当人は選挙運動をすゝるつもりがなかった。それで落選したら、選挙資金がないから落選した、やっぱり金権選挙じゃねえか、とケツをまくるつもりだったという。しかし周囲の説得で基本的な選挙運動だけは行ったから、この七四年選挙のスタイルが青島の素志であった。だがこのときも前回も、当選の見込みはあらかじめ立っていたのである。

青島幸男が中山千夏、八代英太と組んで日本テレビ「お昼のワイドシ

ヨー」の「ホスト」になったのは六八年九月、参院選の二カ月あまりのちである。

いわゆる主婦参加型「ワイドショー」は六四年、NET（日本教育テレビ、のちテレビ朝日）「モーニングショー」に始まる。そのNETは六五年に「アフタヌーンショー」を開始、六八年四月にはフジテレビが「3時のあなた」を始めると、後発の日本テレビも正午から一時までの「お昼」の番組を企画した。有楽町「よみうりホール」をスタジオに、青島幸男と横山ノックが曜日替わりで「ホスト」をつとめたのだが、時事をあつかうナマ番組にタレント政治家を使う危険をあえて日本テレビは冒した。横山ノックは七一年に番組を降りたが、「ホステス」の中山千夏は七六年まで、青島幸男は七九年九月まで十一年間つづけた。

五九年、小学校五年生するとき、東京芸術座の芝居『がめつい奴』（演出・菊田一夫）の演技で評判となり、高峰秀子以来の「天才子役」と呼ばれた中山千夏は、六四年春開始のNHK人形劇『ひよっこりひよたん島』（作・井上厦・山元護久）で「博士」の声を担当した。その人形劇に青島幸男は、六五年、「ハリウッドの売れない脚本家」トンカチーフの声で出演していた。ということは「お昼のワイドショー」では再会だったわけだが、中山千夏の印象は初対面だった。

青島が、テレビ出演を「選挙」のために顔を売る手段と割り切っていると中山千夏には思われたのは、番組の始めと終りの挨拶をするくらいで、司会者としてはまったく消極的だったからである。あまり「何もし

ない」ので、中山千夏はある日、アシスタント・ホストの八代英太と、青島が何かしゃべるまで黙っていようと申し合わせた。沈黙を異常なまでに恐れるテレビで、それは思いのほかの難行であった。

耐えがたい時間がつづいたとき、ふと青島幸男がふたりを振り返って、悠揚迫らぬ口調でいった。

「ん？ どうしました？ つぎはどうなっているんですか？」
仕掛けた方が狼狽する落着きぶりであった。

国会会期中も青島幸男は平気で番組に出演したが、委員会開催決定の連絡が秘書から入ると、本番直前であつても司会席を離れてモニター前に移った。テレビは「欠席」という意志表示であった。

「国会は質問に立つ時と採決のときだけ出ればいいの」と青島はいっ

た。「でも、委員会の開催中にテレビに出てたら、問題にされる」

そういうやり方をマスコミが問題視しなかったのは、時代だろう。

八一年、四十九歳のとき、青島幸男は実家の歴史をえがいた『人間万事塞翁が丙午』ひのえうまという小説で第八十五回直木賞を受けた。

これを書く前、青島幸男は作家になりたいとはいわなかった。小説を書きたいともいわなかった。ただ直木賞を取りたいとだけいった。「目的を決めて、そこに至るもつとも成功の確率が高いコースと方法を選ぶ」、それが青島幸男のやり方であり、生き方なのだ、と中山千夏は思った。その結果青島幸男が選んだ「方法」は、直木賞選考委員の井上ひさしを「コーチ」に頼むことだった。

なぜ、結果として一作しか書かなかった青島を親身になって応援した

のか、「ひょうたん島」以来のなじみの井上ひさしに中山千夏が尋ねると、彼はこういった。

「おれはこのままではダメになる、と本当に目に涙を浮かべて言うんですよ。直木賞をとらせてくれ、と。では、これからはしっかり小説書きますか、と念を押したら、書きます、小説家こそが夢だったんだから、小説に生涯をかけます、と言うんでね」（『芸能人の帽子』）

直木賞受賞によって二十代の予言をすべて実現させた青島幸男は、趣味の絵の腕を磨いて、九八年、二科展に入選した。恐るべき器用人であった。

テレビの原型を創った「職業不定族」

若いテレビ業界で番組構成作家あるいは出演者として、五〇年代から七〇年代まで自在に泳ぎ回った青年たちの最年長は、二九年生まれ、予科練上がりの前田武彦である。

戦後すぐ、鎌倉アカデミアで学んだ前田武彦は、五三年のNHKテレビ放送開始から構成作家となった。軽妙な語り口を買われた彼は、やがてラジオのパーソナリティとなり、テレビ画面にも顔を出した。「テレビの出演者になればギャラ三倍、ヒマ三倍」と青島幸男に自慢したのは前田である。

前田武彦は、六九年には井原高忠が企画したギャグ番組「巨泉×前武

「ゲバゲバ90分！」の冠として名前を連ね、七〇年代に入ると民放テレビの歌番組の司会者で定評を得た。しかし根っから共産党ファンであった彼は、放送中にそのことを口走って干された。だがやがて復帰、テレビ界の重鎮として遇された。

草創期のテレビ画面で活躍、結核で出発が遅れた一歳年長の青島幸男を大いに嫉妬させたのは永六輔であった。永六輔の本名は永孝雄、明国遺臣の子孫で浅草の寺の息子、祖父と父は「永」姓を中国江南音の「よん」と読ませていた。彼が当初から名のつた筆名「六輔」は、「南無阿彌陀仏」六文字の輔たすけを借りるの意で、自ら命名した。

五九年、二十六歳の永六輔は作曲家中村八大から依頼されて「黒い花びら」(水原弘歌唱)を作詞、レコード大賞を受けた。六一年には坂本九が

歌った「上を向いて歩こう」を大ヒットさせた。そのほか「黄昏のビギン」「おさななじみ」「女ひとり」「こんにちは赤ちゃん」「遠くへ行きたい」などを書いて、六六年、三十三歳で作詞家の看板をおろした。どちらも友人である中村八大といずみたくの両立に悩んだ結果、というのが本人の語る理由であった。

この間、六一年、二十八歳のとき永六輔は、NHKテレビの日本初のバラエティ・ショー「夢であいましょう」の構成を担当、六六年までつづけた。その後もテレビ、舞台、ラジオ、書籍と多彩な活動をつづけたが、永六輔の本領はその歌詞に見られる正統的な抒情性にあった。

六五年十一月開始、日本テレビ深夜のワイドショー「11PM（イレブン・ピーエム）」のメイン司会者は音楽評論家の小島正雄であった。しか

し六八年初頭、五十四歳の小島が心筋梗塞で急死すると、司会陣の一角をになっていた大橋巨泉が繰り上がって、全国的な知名度を得ることになった。

学生時代に俳句に親しんだ大橋巨泉(巨泉は俳号、本名克巳)は、六九年、パイロット万年筆のCFに出演した。

商品を手にしつつ、「みじかびの きゃぷりきとれば すぎちよびれ すぎかきすらの はっぱふみふみ」という短歌もどきをほとんど即興で詠んで、テレビ画面で不敵な笑みとともに「わかるね」といった。このときは別台本の「まとも」なコピーの分も撮影してあり、選択は会社に任されたが、巨泉は「台本の方を使うようなら、この会社も長くはないな」とうそぶいた。

この歌を、一種の秀歌として評価したのは歌人岡井隆であった。

「ナンセンスの中に意味があり、意味の中に無意味が潜んでいる。この歌は案外、短歌という詩型のもつ、リズムと音韻と意味との関係の、伝統的な本質を示したともいえる」(岡井隆『現代百人一首』)

その六九年、大橋巨泉は二十一歳のモデル・女優の浅野寿々子と再婚した。このとき公称三十九歳であった大橋巨泉は、年齢を四歳多く詐称してきたことを明らかにした。要するに、持ち味の「大きな態度」の根拠が欲しかったのだろう。

大橋巨泉は七六年から「クイズダービー」の司会者となり、九〇年三月、五十六歳で「セミ・リタイア」を宣言するまで続けた。「セミ・リタイア」とは一年の四分の三は海外で土産物屋をやりながら過ごし、帰

国する三カ月だけテレビに出る生活のことであつた。だが二〇〇一年、参院選に民主党から出馬した。カナダ在住のまま選挙当日を迎えたいと巨泉はゴネたが周囲に説得されて帰国、おざなりな選挙運動にもかかわらず当選した。

しかし民主党両院総会で大橋巨泉は「民主党は社会主義インターナショナルに加盟せよ」と発言、反米色を強く打ちだして「党議拘束」に従わず、わずか半年で辞職した。彼は社会主義者ではなかつた。日本には「左派」が一定数必要だとの考えが動機で、このようなバランス感覚は彼ら「テレビ人間」に共通するセンスであつた。

週刊誌「サンデー毎日」に「職業不定族」と題した記事が載つたのはテレビ勃興期の六二年である。青島幸男、永六輔、前田武彦、中原弓彦

の四人を、「現代」を象徴する「才能多角経営人間」としてクローズアップ、「俺たちちや、職業不定族」という見出しがつけられた。

青島幸男と同年生まれ、日本橋の和菓子老舗の長男中原弓彦は、編集者からフリーの書き手となり、この六二年前後はテレビの構成者・出演者として生活を立てていた。六五年には井原高忠に依頼されて、坂本九のバラエティ「九ちゃん！」のコントを井上ひさし、河野洋らと書いた。この間にも『日本の喜劇人』『世界の喜劇人』を書きつづけていた中原弓彦は、六六年、本名の小林信彦に戻って素志の小説家をめざす態度を鮮明にし、彼がタイトルネーミングしたとされる「ゲバゲバ90分！」を最後にテレビ業界から離れた。

明るいニヒリズムを遺して去る

青島幸男は九一年、五十九歳のとき悪性リンパ腫を病んだ。このときは抗癌剤で克服したが、知事退任から七年、二〇〇六年十二月二十日に亡くなった。骨髓異形成症候群、七十四歳であった。九一年の抗癌剤使用の後遺症ともいわれる。

やや短命であったこの器用人の全盛期は一九六〇年代、その二十代末から三十代にかけてであった。「スーダラ節」のほか、「ゼニのない奴は俺んとこへ来い、俺もないけど心配すんな」と植木等が歌った「だまつて俺についてこい」、坂本九「明日がある」などの歌詞は、たしかに高度経済成長の時代精神を体現して歴史に残る。しかし、だからこそ参院

議員も東京都知事職もよけいだった感がある。

テレビ界の大御所として自適していた前田武彦は二〇一一年八月五日、肺炎で亡くなった。八十二歳であった。

一九七四年、野坂昭如、小沢昭一とともに「中年御三家」と称して日本武道館を満員にするコンサートを行った永六輔は、七七年、中山千夏らの革新自由連合に参加、八三年には参院選に出馬したが落選した。以後も反体制的議論は維持したものの、政治には近づかず、九四年には『大往生』（岩波新書）をベストセラーにした。二〇一〇年、パーキンソン病と診断されて車椅子の人となった。しかしTBSラジオの「誰かどこかで」は、二〇一三年までの四十六年間つづけた。

大橋巨泉は二〇〇五年に胃がんを病んだ。それは寛解したが、一三年

以降は中咽頭がん、縦隔リンパ節がん、肺がん、腸閉塞と多病であった。彼は二〇一六年二月四日、テレビ朝日の黒柳徹子のインタビュ番組「徹子の部屋」の四十年記念に車椅子の永六輔とともに出演した。口調ははっきりしていたもののこのとき体重五十キロ、面変わりしてにわかには本人とはわからなかった。

一方車椅子の永六輔は口が閉じず、病気による衰えが明白な姿だった。それでも青年時代の面影を宿した彼は、不十分な発声ながら徹子を相手にテレビ揺籃期の思い出をしゃべった。亡くなったのは二〇一六年七月七日、八十三歳であった。その五日後、大橋巨泉が八十二歳で亡くなった。

地上波テレビの初期をになったのは、青島幸男ら東京出身、それも下

町出身の「学童疎開」世代の青年たちであった。日本のテレビ文化に軽快さと軽薄さをあわせ持つ明るいニヒリズムの遺伝子をもたらしたのは、「江戸前」の発想としゃべり方、地方嫌い、会社員以外の道で生きて行くという決意、そうしてショービジネス好きで「アメリカ文化」に何ら抵抗を感じない、青島幸男をはじめとする一団であった。